

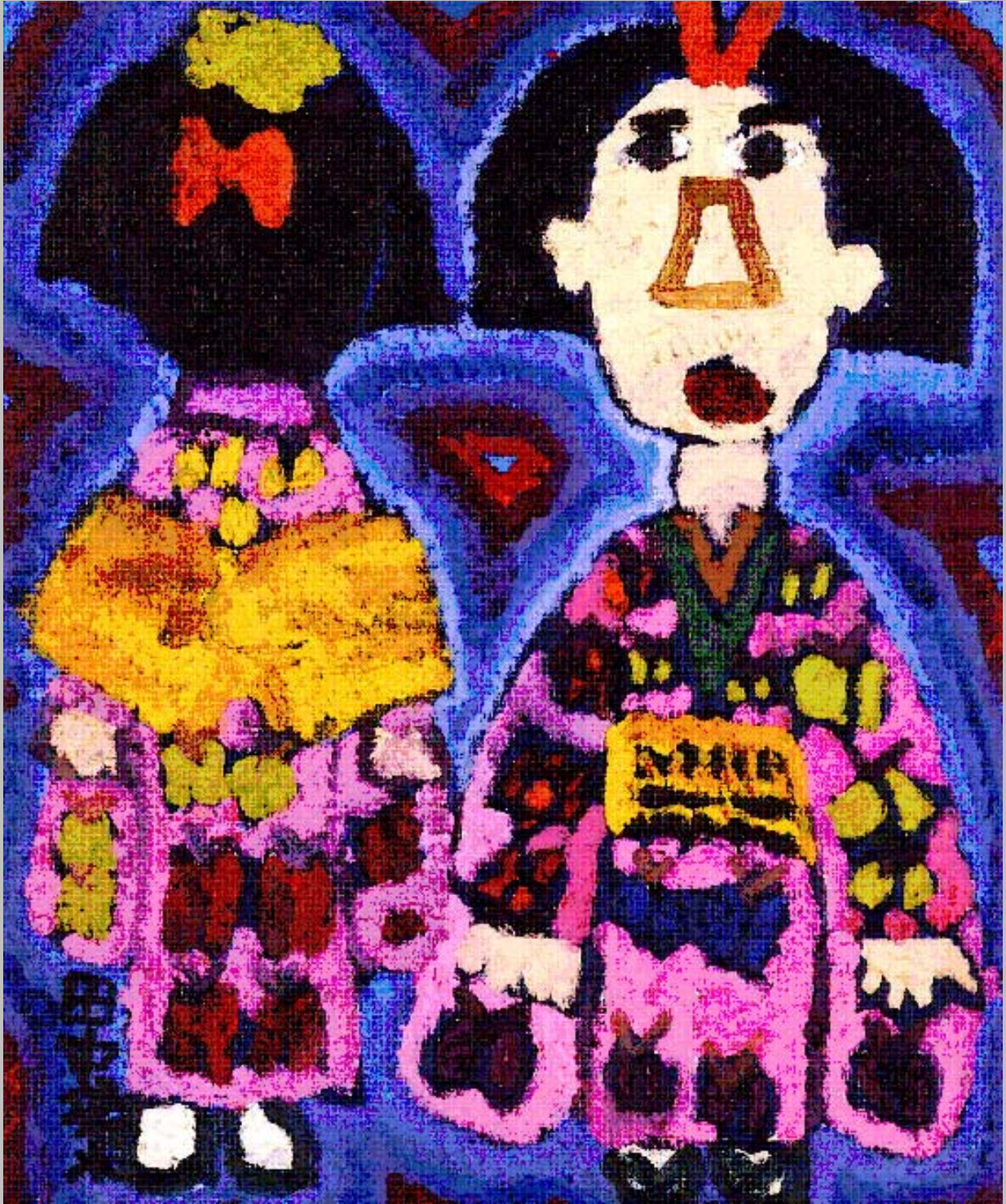
SSKW

海から海へ

No.29 2011.12.27

【編集人】

特定非営利活動法人 海から海へ
〒182-0024 東京都調布市布田 1-32-5
マートルコート調布 407
Tel 042-441-2958 Fax 042-497-4878
<http://umi.or.jp> office@umi.or.jp



きものを着た由紀ちゃん Yuki Dressed in Kimono 727x606 1992 © Mizuki Tanaka

海から海へは、障がいをもつ人から渡される豊富なものの存在に気づき、人々と共有するため、障がいをもつ人を中心とした、文化芸術活動、研究活動、社会教育活動、心理カウンセリングなどの支援活動を行うこと、および、それらの活動を通し、障がいの有無にかかわらず、地域・国内・国外を問わず広く交流を深め、人々がより良く生きることに貢献することを目的として活動しています。

年のはじめの贈物

年のはじめ、若者たちからたくさんの贈物をいただきました。

まずはK君とNさんのカップル。昨秋結婚し、ハワイで2人だけの式を挙げました。元旦に連れ立ってやってきて、一緒に新年を祝いました。彼が設計した自転車が私の職場に置いてあります。彼からの贈物です。見る人の多くが、いいですね、と言ってほめてくれます。彼は小さいころから自転車が大好きで、ずっと自転車がそばにありました。今は自分が設計し海外で製造したスポーツ自転車や、海外から輸入した自転車を販売しています。結婚式で撮ったDVD写真集には、韓流スターみたいなK君と、女優みたいなNさんがいろいろなポーズで映っています。プロのカメラマンの注文でしょう。派手なことが苦手なK君がNさんの願いを聞いてということだったと思いますが、2人ともとても嬉しそうで、見ているこちらも嬉しくなってしまう。すてきな贈物です。

職場では学生たちと新年初のゼミをしました。論文提出を間近に控え、限られた時間の中でどのように目標に到達するか、目標そのものをどう調整するかというゼミです。こうありたいと思う目標は、学生自身によってすでに定められています。この目標をAとします。今の時期、Aに到達できるかという、たいていは無理です。一方、論文は、読む側の身になって書かなければなりません。私の役割は、どうすれば読み手を満足させられるか、その見通しを示すことです。学生には、「目標をBに置けば、読み手は満足する、だからだいじょうぶ」と安心してもらいます。その上で、できるだけAに近づこうね、と。Bは時間と状況により変わります。このようなことは、物事を進めるどんな場面でも生ずることかもしれません。ゼミの終わりで学生が示す、よしやるぞという表情は私にとって贈物です。

米国のNGOスタッフとして、アフリカで難民支援をしている若者K氏の講演を聞きました。はじめに「難民」の定義がありました。それは、多様な価値観を許さない環境から逃れざるを得なかった人間であり、自分と対等な人間であると。K氏の話しからは、自分がこうありたいと思う目標へ向かって、その時その場に応じ、とりあえずの目標を設定し、手を替え品を替え接近する、そのプロセスを楽しんでいることがよく分かりました。アフリカの人々の笑顔と、スライドを見せるK氏の頼もしさがとてもまぶしく見えました。成果を報告書にして国連に提出し、他の支援団体にも広げるという計画も話されました。7人兄弟の末っ子で、優秀な兄姉たちにコンプ

レックスを持っていたとのことでしたが、彼からは、愛されて育った自分への肯定感と誇りが感じられました。

グループホームの新年会では利用者のM君と彼のお父さんにお会いしました。お母さんは、数年前亡くなられ、以来お父さんは、M君が週末家に帰ってくるのを楽しみにしています。一方で、「この子は悲しみという感情を持たない、母親のお墓にも決して行かない、私がいなくなっても悲しまないだろう」と話され、「だから安心」とおっしゃいます。M君は、「お父さんを愛しているよ、お母さんはこの世にいなくてもいつも思っているよ、お母さんとそのお墓とは関係がないよ」と言いたいのでしょうか。そして、M君を愛しているお父さんは、自分がこの世からいなくなっても息子は悲しまないと自分に言い聞かせているのだと思いました。

同じ新年会で、私は、「M君、Mさん、Kさん、Cさん、皆さんのおかげで今ここにいられて嬉しいです。たくさんの困難がありますが、それを乗り越えるために、皆さんから力をいただきたいです」とご挨拶しました。しかし、私の隣のMさんはそっぽを向いています。「ほんとはできるの？私は関係ないよ」という感じです。誰かに寄り添うということは、迎合することではない。その人を大事に思うことから良いコミュニケーションが生まれ、相手に伝わる。自分を愛し、相手を愛する程度により、伝わる力は強くなる。この力は、感じることで、教わることで、そして変わることでのみ得られる。そして、それは口で言うほど容易なことではない。Mさんからこういうことを教えてもらったと思いました。

年のはじめ、たくさんの贈物をいただきました。この一年、私も誰かに贈物を、と思います。(阿部公輝)



展覧会のチラシを渡す画家と
「行きたいですね」と伊豆稲取のみかん園のTさん

もうすぐ展覧会が始まります

前号で、ご案内しました個展がまもなく始まります。場所は静岡市清水区の「えじり保育園」です。

えじり保育園園舎入口にある大きなひのきの柱が訪れる人々をお迎えしてくれます。その幹はまっすぐ天に向かって伸び、枝はあらゆる方向へ広がって、まるで、子ども達がこれから歩もうとする未来を象徴しているかのようです。2階には子ども達が自由に遊べるアトリエも作られています。

さて、このような場所で、田中瑞木の絵画が展示されるというのはどうしてなのかしらと、思われることでしょう。それはふしぎなご縁というべきことがあったからです。2009年春から秋にかけて、八ヶ岳で個展が開かれ、多くの来場者にお会いできたことは、まだ鮮烈な記憶のままですが、その折に今回の「えじり保育園」の井出園長ご夫妻に会いました。お二人は新婚時代に八ヶ岳に旅行し、それから機会あるごとに訪れていたようですが、その夏も仲良く旅に出られ、偶然目にした美術館前の「みーちゃんの展覧会」という垂れ幕が、お二人を美術館内へと誘ってくれたそうです。そこにはやはり偶然会場に到着したばかりの画家の家族がおりました。

熱心に絵を見てまわるお二人に当法人の理事長阿部公輝が声をかけました。井出雅士さんの父上も画家であるとのこと、みや子さんの保育園は開園したばかりで壁には絵を展示するためのスペースを作ったとのこと、開園1周年記念で絵を見せられたらなどと話が弾み、すっかり打ち解けたのでした。

それから2年たち、静岡のみなさまに見ていただく機会となりました。毎日登園する100人以上の園児さんの目に、田中瑞木の絵画はどのように映るのかと考えると、今からワクワク、ドキドキいたします。

今回、雅士さんの小学校からの旧友で、ともに保育園の設計に関わられた澤野眞一さん、お父様の代から親交のある地元の画荘清野様、東京から絵を運んでくださる調布市山口酒店の山口昌之・ひろみ夫妻と粕谷富久代さんが協力くださっています。主催の社会福祉法人愛泉会からも多くの援助をいただき、準備が行われています。清水区は東京から東名高速道路で100分。新幹線こだまで1時間強。ちょっとした旅行です。海岸通りには、港に関する展示があるフェルケール美術館(交通・交際を意味するドイツ語の名前)や有名なレストラン「ミクニ」があります。その前側の海に面したスペースには静岡名産が並ぶエスパルスドリームプラザ、そこには10軒の清水すし横丁があり、にぎわっています。羽衣伝説で知



打ち合わせ中の井出みや子さん、澤野眞一さん、井出雅士さん

られた三保の松原へも近いです。周辺ではイチゴ狩りも楽しめます。

一般開放日は2月5日、11日、12日(14時まで)の3日間。作品は30点を予定しています。作家は12日の午後に会場にいます。

絵はコミュニケーション

毎号、表紙の絵を選ぶとき、作品の対象や季節感など、絵から醸される雰囲気を考え検討を重ねるが、大体、理事長のアイディアの方が冴えていて、学芸員の私よりぴったりとした選択をする。今回の「きものを着た由紀ちゃん」もそうだった。

これは、1992年画家が19歳のときに描いた作品だ。由紀ちゃんは画家のいとこの一人で、その当時は結婚し2児の母になっていた頃と思う。

由紀ちゃんが結婚当初、画家は弟と一緒に、群馬県前橋まで泊りがけで遊びに行っていた。いろいろな場所に連れて行ってもらったりして楽しかったようだ。

画家がこれを描こうとしたとき、画家の脳裏にきものを着ているいとこをどのように想像したのかは分からない。(説明してはくれないから。)

でも、私はひとつエピソードを思い出す。それは、結婚する姪に私が手持ちの着物をプレゼントしたこと。子どもたちの卒園式で着たサーモンピンク色の綸子地の色留袖が、姪にもこれからの生活で子どもが生まれればきっと役に立つだろうと思っただけのことだった。その場に確か娘がいた。娘は覚えていたのかもしれない。



娘にはきものを着た由紀ちゃんがイメージできたの
だろうと、今になって気づいた。

絵を通じて、画家の人間交流が見えてくる。やはり、
娘にとっては、絵はコミュニケーションなのだと思
う。絵を描いているとき、絵の中の対象とコミュ
ニケーションをしている娘は確かに楽しそう。面白
そう。そうでなければあれほど熱中できないと思
う。

言葉は音声だけではない。言葉にできない思いも
また、言葉なのだ。察するという行為が私たちのこ
ころを研ぎ澄ます。そのような「ところとところの
交流」があることを娘から、絵から、教えてもら
っている。

美術館より

昨年9月25日(日)10時から、田中瑞木美術館の
展示替えが行われ、夏から秋へと16点の作品が
装いも新たにお目見えしました。そのとき、お
手伝いいただいた粕谷富久代さんと山口ひろ
みさんが画家とともに写真に…。このドライ
ブという絵は50号のサイズです。結構、額が
しっかりしていて重いのですが、軽々と持ち上
げ、壁に掛けました。



画家が見ている前で、左右の微調整を
しています。絵を箱から出したり入れたりして、
最後にタイトルまでつけると終了です。展
示替えの後は、お茶タイム。ご近所なら
ではの情報交換や近況報告などで話が盛
り上がります。

12月11日は秋から冬へと展示替えの
予定でしたが、冬の展示替えをしないま
ま、現在静岡の展覧会の準備に入ってい
ます。

上述の理由で、1月と2月は休館です。
3月からは、春の絵に変わります。また、
お出かけ下さい。開館日は毎週日曜日
の午後1時から5時まで。入場無料。ス
ケジュールはホームページ <http://umi.or.jp>
で確認できます。電話 042-441-2958
などでもお問合せは可能です。
(以上、学芸員)

編集後記

新年の始まり。ゆっくりとした時間を過
す。例年通り、元旦に家族で膳を囲む。
今年は新たな顔ぶれでうれしい限り。
時間の流れを意識する。

しょうがいの子もとともにいる時間
が苦しいだけのときがあったが、その
子が20歳を過ぎるころから、穏やかな
時間を過ごすようになった。その子
は今では生活のあらゆる場面で私の
助っ人だ。精神的にも支えられている
ことを感じている。芯が一本通って
いる人だから、揺らぐことの多い私
には心強い存在だ。

過去において、このような日が来よう
とは、どのように想像しても無理だ
った。そのことは忘れられない。し
かし、人は変わる、変わる、のだ。
なぜ？

不可能なことと決めかかっているとき
、そのときは自分ができる範囲、あ
るいは考える範囲でしかものごと
は見えてない、見えてこない。それ
程自分に執着している。一人で何と
かしようともがく。「自分のことは
自分でしなさい」といつも言われて
きたことも関係があるだろう。それ
は、新しい自分へと変わっていくと
き、周りの方々から援助を受けつつ
、新天地が広がって見えてくること
と正反対だ。

いま思う。大事なことは自分を信じ
、誰かと寄り添うことではないかと。
家族という最小単位の社会から始
めてみよう。母から娘たちへ、娘
たちから母へ、息子から母へ、母
から息子へ、親たちから子どもたち
へ、子どもたちから親たちへ。それ
ぞれがもっている可能性を素直に
表に出せるように、どんなことでも
大丈夫、受け止めるよと、心から
応援していこう。

せっかく生れたのだから。

せっかくお互い巡り会えたのだから。

せっかく同じ時間を共有できるのだから。

せっかく同じ方向を見られるのだから。

そして、もっともっと広げよう。多
くの方々と同じ方向を見て歩いて
いく2012年にしたい。(愛)

特定非営利活動法人 海から海へ

<http://umi.or.jp> office@umi.or.jp

2011年12月27日 海から海へ No.29

編集責任者 阿部公輝

〒182-0024 東京都調布市布田 1-32-5

マートルコート調布 407

Tel 042-441-2958 Fax 042-497-4878

発行所 〒157-0073 東京都世田谷区砧 6-26-21

特定非営利活動法人障害者団体定期刊行物協会

定価 200 円

無断転載禁止